

濱田 仁：接合藻の和名の提唱と学名の由来について

Jin Hamada: Proposal of Japanese names for Conjugatophyceae and the origins of scientific names

Key Index Words: Conjugatophyceae—Desmids—Japanese name—Scientific name—Zygnematales.

Jin Hamada, Department of Community Medicine, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University, Sugitani, Toyama 930-01 Japan

微細藻類の名前については一般には学名があるのみで、各々の国の言葉で名前が付いている藻は非常に限られている。例えば、著者が興味を持っている接合藻についても、一部のものにしか和名が与えられていない。欧米諸国の場合、学名、即ちラテン語、またはラテン語化したギリシャ語と、各国言語との間には密接な関係があり、その藻の形態や性質などを思い浮かべるのに大きな不便はないと思われる。しかし日本語の場合、ラテン語は本質的に異なった言語であり、学名からその藻についてのイメージを抱くことはほとんど不可能に近い。藻類学を、専門の学者だけでなく、一般の人にも少しでも理解して貰い、普及させるには、和名が是非必要と思う。例えば著者の場合、比較的簡単に採集できる *Netrium* について一般の人に話すと、必ず和名は何ですかと聞かれる。

そこで、接合藻の中の主なものについて、属の新称 25 と種の新称 1 を以下に提唱したい。本稿では、和名が既に発表されているものについても、命名者や由来が分かるものは便宜の為にまとめた。また学名の属名の意味を記した。特に野外で比較的良好に観察出来るものについては、種名の解説も試みた。

ところで、普通和名というのは時代や地方で変わり、学名のように原則として一度命名したら変更出来ない、という規則はない。新称の中のあるものは、やや上品さに欠けるかもしれない。しかしその類は、既に使われている和名の中にも散見されるようであるし、むしろ、そういう名前の方が親しみやすく覚えやすい場合が多いようである。本稿における和名も断定的、固定的なものではないので、より上品にその藻の形態や性質を表し、親しみやすい名があったり、また誤りがあれば教えて頂きたい。何はともあれ、本稿がきっかけとなって、藻に対して親しみを感じて下さる方が、少しでも増すことを願っている。

Actinotaenium (フグリモ, 新称): 細胞の形がフグリ

(擧丸) に似ている。学名の *Actinotaenium* は、ギリシャ語の *aktinos* (放射状の光) と *taenium* (帯) から。葉緑体の形状から付けられたと思われる。種名の *cucurbita* はメロンのような、*obcuneatum* はクサビ状になる。

Closterium (ミカヅキモ): 細胞の形が三日月形であるところから。しかし属全体では必ずしも三日月形の種類ばかりではない。ちなみに中国語では新月藻という。和名の命名は松村 (1897) 以前という (日本淡水藻図鑑, 1977)。Closterium はギリシャ語の *Kloster* (紡錘) から。*acerosum* は尖った、針のような、*angustatum* は細い、*closterioides* はミカヅキモ属に似た (Ralfs, 1848 では *Penium* 属)、*cynthia* は *Cynthus* の女、即ち貞操と狩猟の女神 *Diana* のこと、*dianae* は女神 *Diana* から。*ehrenbergii* は 19 世紀ドイツの植物 (藻類) 学者、*Ehrenberg* から。*gracile* はほっそりした、優美な、*intermedium* は中間の、*leibleinii* は 19 世紀初めの藻類学者 *Leiblein* から。*lineatum* は線状の印のついた、*lunula* は半月の、*moniliferum* は 1 列のビーズ、またはネックレスのような。和名のミカヅキモはそもそもこの *C. moniliferum* に付けられた (松村, 1897, 1904, 日本淡水藻図鑑, 1977 による)。*navicula* は舟形の、*parvulum* は非常に小さい、*pritchardianum* は錐 (きり) の、*ralfsii* は 19 世紀英国の藻類学者 *Ralfs* から。*rostratum* はくちばしのある、又は長く真っ直で堅い尖端の意。*striolatum* はわずかに縞のある (*C. striolatum* の和名はスジミカヅキモ、松村 (1897, 1904)、*venus* はローマの美の女神から。

Cosmarium (ツヅミモ): 細胞の形が鼓形をしている。和名は松村 (1897) またはそれ以前。*Cosmarium* はギリシャ語の *cosmina* (装飾) から。細胞壁の表面には多くの装飾を伴った孔がある。*decoratum* は気品のある、*obtusatum* は丸い、尖らない、*punc-*

tulum の puncta は穴のある表面。
 Cosmocladium (イトフグリモ, 新称): フグリモが糸状につながっているところから命名。Cosmocladium の Cosmo はラテン語で美しい, cladium は枝(のある)。constrictum はラテン語で細でくくる, 結ぶ。
 Cylindrocystis (フタバシモ, 新称): 星形の葉緑体が2個あるので命名。学名の cylindrocystis は, ギリシャ語の kylin-dros (円筒) と kystis (水泡, 浮き袋) から。brebissonii の Brebisson は有名なフランスの藻類学者の名前。jenneri は, Ralfs の著書「英国産のツヅミモ類, 1848」の見事な図を描いた Jenner に因む。
 Debarya (ホネオリ, 新称): ヒザオリ亜科に属し, 接合過程がホシミドロモドキと同じ性質を持つ(山岸, 1977)ので, ヒザオリモドキとしたかったが, 学名の意味から Mougeotiopsis にヒザオリモドキが取られた。形態からと, 命名に骨折したので命名。Debarya はフランスの藻類学者 deBary に因む。本邦未産であるが(山岸, 1977), 骨を折れば本邦からも見つかるかもしれないという期待も込めたい。
 Desmidium (チリモ): 命名者, 命名年, 名前の意味などは不詳。コウガイチリモが1900年の命名なので, チリモはそれ以前と推定される。広辞苑(岩波), 大辞林(三省堂)では塵藻となっており, 塵を連想させるが, つながった細胞が回転しており, 非常に綺麗な糸状藻である。縮れた, という意味を表す「ちりちり」からではないかと思う。山岸(私信)によれば, 鼓を打つ時, 三味線に入れる合の拍子の言葉の「チリタッタ」からではないかという。つまり, ツヅミは既にツヅミモに付けられたので, 鼓につきもののチリタッタからチリモと命名されたとのことである。Desmidium はギリシャ語の desmos (結び付けるもの, 又はきずな)に由来。apto は備える, gonum は角度のある。swartzii は, 人名(Swartz)から。
 Docidium (ウネリマクラ, 新称): 横から見た枕が, 小波を打った形。本藻は始めナミマクラとしたが(濱田, 1990), 既に海産褐藻の Elachista fucicola に与えられていたので変更。Docidium はギリシャ語の dokidion (小さい棒)から。undulatum は波打った, うねるの意のラテン語。
 Euastrum (イボマタモ, 新称): 細胞の形態が, 疣だらけの股のようである。学名は Euastrum。ギリシャ語の eu (本当の)と astron (星)の合成。種名

の ansatum はラテン語で柄のある。oblongum はやや長い, 楕円形の。verrucosum は疣(いぼ)の, 疣だらけの。

Gonatozygon (ケズネモ): 市村(1973)によれば, 「私の仲間のひとり, Gonatozygon のことをケズネモと呼んだ。上品ではないが, 特徴を良く表現していると思う」とある。Gonatozygon は, ギリシャ語の goneia (角度のある)と zygo (つながった)から。細胞が曲がりながらつながっている様子からと思われる。種名の brebissonii は Cylindrocystis の項を参照。monotaenium は mono (1つの)と taenium (帯)から。

Haplotaenium (ヒトツオビコウガイ): コウガイチリモ属から別れた新属(坂東, 1988)。葉緑体が中心に1本あるところから命名。Haplotaenium は1本の帯の意味。minutum はラテン語で大変小さな, rectum は真っ直な。

Hyalotheca (シラタキミドロ, 新称): 糸状に連なった藻がシラタキのような寒天質で包まれているので命名。hyalotheca はギリシャ語の hyalos (無色)と theca (容器又は包み)から。dissiliens は飛び散る, mucosa は粘液の。

Mesotaenium (サヤマメモ, 新称): 形が莢豆に似ているので命名。Mesotaenium は, ギリシャ語の mesos (中央)と taenia (帯)から。

Micrasterias (アワセオオギ, 新称): 既に藻類研究法(1979)には, クンシヨウチリモの名がある。しかし, 形が扇子を2個合わせた種が多い上, クンシヨウモやチリモは和名として既にあり, まぎらわしいのでアワセオオギとした。Micrasterias はギリシャ語の micros (小さい)と astron (星)から。種名の apiculata は短く太い尖りのある。ceylanica はセイロン(国名)の, decemdentata は10の歯のある, notata は印を付けた(英語の note)。pinnatifida は羽毛(pinna)のように(fidus)裂けた, thomasiana は人名(Thomas)から, truncata は切断された。

Mougeotia (ヒザオリ): 有性生殖で接合子を作る際, 膝を折ったように曲がることから付けられたという。岡村(1902)にはなく, 岡村(1916)には見える。Mougeotia は, 19世紀の藻類学者 A. Mougeot に因む。scalaris はラテン語で梯子の。M. scalaris は, 斎田(1910)により, ハシゴモと命名されている。virescens はラテン語で淡緑色の。

Mougeotiella (ステゴヒザオリ, 新称): ヒザオリに似ており, しかも接合の際, 細胞の一部は配偶子に

ならず、細胞質残滓（ざんさい）として配偶子形成に関与せず捨てられる（山岸，1977）ので命名。

Mougeotiella は Mougeotia（ヒザオリ），ella は小さいことを示す接尾辞。sphaerocarpa の sphaero は球形の，carpa は果実，即ち接合子。

Mougeotiopsis（ヒザオリモドキ，新称）：Mougeotiopsis は Mougeotia の外観を持ったと言う意味。ヒザオリ亜科に属し，接合過程がホシミドロ，アオミドロと同じ性質を持つ（山岸，1977）ところから命名。

Neozygonema（ステゴホシミドロ，新称）：ホシミドロに似ており，しかも接合過程が，ステゴヒザオリと同じ（山岸，1977）ところから命名。Neo はギリシャ語の Neos（新しい）から。

Netrium（ハタヒモ，新称）：細胞の外形が機（ハタ）を織るときの子（ヒ）に似ているので命名したが，もともと Netrium はギリシャ語で，機織の子を意味する Netron からであった。digitus はラテン語で指。interruptum は，ラテン語で散らばった，まばらな。

Penium（タテブエモ，新称）：細胞の形が縦笛に似ている所から命名。Penium はラテン語の penna（ペン，羽）からと思われる。cylindrus は筒，margaritaceum は真珠状の，phymatosporum の phymato は腫瘍またはふくらみ，sporum は孢子。silvae-nigrae は黒い森，spinospermum は刺のある実，spirostriolatum は螺旋形でわずかに縞の入った。

Pleurotaenium（コウガイチリモ）：細胞の形が，歌麿などの浮世絵の美人女性が髪飾りに挿している棒状の笄（こうがい）に似ているところから。但し，旧仮名遣いで，「かうがいちりも」とある（大野，1900）。Pleurotaenium はギリシャ語で複数の帯。葉緑体が多くあり，細胞壁の周囲に分布しているところから。ehrenbergii は Closterium の項を参照。nodosum は節のある，顕著につながった，特に P. nodosum をコブコウガイチリモ（新称）とする。trabecula はラテン語で小さな柱。

Roya（ナギナタモ，新称）：細胞の形が長刀（なぎなた）に似ている。Roya は藻類学者の J. Roy から。anglica はイギリスの，cambrica はウェールズの。

Sirocladium（ジカヒザオリ，新称）：ヒザオリ亜科に属する。Siro はギリシャ語の seira（series，連続）cladium はラテン語で枝（のある）。

Sirogonium（スジミドロ，新称）：アオミドロに似ているが，葉緑体が縦に筋の入った形から命名。Sirogonium は，ギリシャ語の seira と gon（生殖質

の構造）を合わせたもの。sticticum は，ラテン語でスポットのある。

Sphaerososma（カギトマキミドロ，新称）：イトマキミドロに似た細胞が，鍵に似た突起で連なるので命名。Sphaerososma は，ギリシャ語の sphaero（球形の）から。zosma は不明。aubertianum は，19世紀の植物生理学者の Aubert からと思われる。granulata は粒状の。

Spinoclosterium（トゲミカツキモ）：ミカツキモに似ているが，細胞の両端に刺がある。Spinoclosterium は刺のあるミカツキモの意。日本淡水藻類図鑑（1977）に出ている。cuspidatum はラテン語で突然細くなる，短く固い尖端。

Spirogyra（アオミドロ）：青味泥（岩波，広辞苑）。ミドロは血みどろ等のみどろ，または緑が転じたものとも思われる。アオミドロの名は大野直枝（1899），松村（1897，1904）に見えるという（旧仮名遣いでは，あをみどろ）。Spirogyra は，ギリシャ語の speira（コイル，とぐろに巻いた物，螺旋形の）と gyros（からみ合わせる，前後に曲がっている）の合成形で，その葉緑体の形態から，種名の fluviatilis はラテン語で川や小川に生えている。gracilis は細い，優美な，S. gracilis の和名はヒメアオミドロ（斎田，1910）。micropunctata の micro は小さな，punctata は表面があばたのような。yunnanensis の Yunnan はラテン語で中国の雲南，…ensis は…産の。

Spirotaenia（ネジモ，新称）：葉緑体がネジのように巻いているので命名。Spirotaenia はギリシャ語の speira（螺旋状の）と taenia（帯）から，erythrocephala の erythro は赤い，cephala は頭，condensata は，ラテン語で一緒に込み合った。oblonga はラテン語で先端が丸く楕円形の。obscura は黒い，暗いまたは不明瞭な。

Spondylosium（イトマキミドロ，新称）：糸状に連なった細胞の1個は糸巻きに似ているところから命名。Spondylosium はギリシャ語の spondylus（二枚貝）から。細胞が二枚貝に似ている。moniliforme は，一列のビーズ，またはネックレス状の，leutkemuellieri は19世紀末～20世紀初めの藻類学者，J. Lütke-müller から。

Staurastrum（ホシガタモ）：細胞全体が星型をしている。新称のつもりでいたが（濱田，1990），既にこの和名は広瀬（1959）に見える。この属はかなり大きく，様々な形態のものが含まれている。

Staurastrum はギリシャ語の stauron (十字又は交叉) と astron (星) の合成。aculeatum はラテン語で刺すような, armigerum は武器を持った。cerastes はツノヘビ, controversum は争いの, furcigerum はさすまたを持ったの意か? japonicum は日本の, ornatum は飾られた, 立派な。subsaltans は塩基性塩。

Temnogametum (ニセヒザオリ, 新称): ヒザオリ亜科に属し, ニセアオミドロと同様の性質を持つ (山岸, 1977) ので命名。Temnogametum はギリシャ語の temno (切断, 通過) と gametum (配偶子) の合成形。boreale はラテン語で, 北の。

Temnogyra (ニセアオミドロ, 新称): 山岸 (1977) によれば, アオミドロ亜科に属し, ニセヒザオリ同様, 不稔細胞と接合管を生ずるので命名。Temnogyra はギリシャ語の temno と gyros (絡み合わせる) の合成形。punctata は Spirogyra を参照。

Tetmemorus (カメガンシラモ, 新称): 亀頭に似ているので命名。亀頭は音読みしない方が上品(?)。Tetmemorus の morus は桑。laevis は滑らかな。

Triploceras (オノノカナボウ): 細胞の形態から命名された。水野 (1964) に見える。学名の Triploceras はギリシャ語の triploos (3倍の) と ceras (角または角状の突起) に由来。gracile は Closterium の項を参照。

Xanthidium (トゲツツミモ, 新称): トゲのあるツツミモ状の形態から命名。Xanthidium はギリシャ語の xanthi (黄色) から, dium は空。apiculatum は短く, 太い尖りのある。

Zygnema (ホシミドロ): 1個の細胞に2個ある葉緑体の形が星形をしている。ホシミドロの名は既に岡村 (1902) に出ている。遠藤吉三郎 (年代不詳) により, ホシガタミドロと呼ばれ, 川村 (1918) でも使われたという (山岸, 私信)。Zygnema はギリシャ語の zygon (軛, くびき) と nema (糸) との合成形で, その葉緑体の形態から。peliosporum の pelios は生命のある, porum は孔とか穴。

Zygnemopsis (ホシミドロモドキ): ホシミドロ亜科に属し, 接合過程はヒザオリモドキと同じなので命名された (山岸, 1967)。また, 水野 (1964) はニセホシミドロとしている。学名の Zygnemopsis は Zygnema のような形をした, quadrata は四面の。

Zygonium (ベツホンミドロ, 新称): ホシミドロに似ているが, 接合過程が少し別なので命名。Zygonium はギリシャ語の zygo (つながった) と goneia (角度のある) からと思われる。ericetorum は灌木の1種ヒースの生えた荒野の。

なお, 本稿は濱田 (1990) を元にした。

謝 辞

日本赤十字看護大学の千原光雄先生と日本大学農獣医学部の山岸高旺先生からは, 多くの御親切な御教示を戴いた。心から感謝の気持ちを表したい。

文 献

- 秋山 優・広瀬弘幸・山岸高旺・平野 實 1997. 緑藻綱. 275-759. 広瀬弘幸・山岸高旺編 日本淡水藻図鑑. 内田老鶴圃新社. 東京.
- 坂東忠司 1988. Haploetaenium, a new genus separated from Pleurotaenium (Desmidiaceae, Chlorophyta). Journ. Jap. Bot. 63: 169-178.
- 千原光雄 1997. 藻類の分類. 701-728. 西沢一俊・千原光雄編 藻類研究法. 共立出版. 東京.
- 濱田 仁 1990. 接合藻の生物学. pp 264 (自費出版).
- 市村輝宜 1973. 微細藻類の培養に関するあれこれ (5). -ミカヅキモ その1-遺伝 27(3): 64-68.
- 川村多実次 1918. 日本淡水生物学 (上巻). 裳華房. 東京.
- 松村任三 1897. 植物名彙. 3版.
- 松村任三 1904. 帝国植物名鑑. 東京.
- 水野壽彦 1964. 日本淡水プランクトン図鑑. 保育社. 大阪.
- 大野直枝 1899. あをみどろの一種に於ける接合の異例. 植雑 13: 212-214.
- 大野直枝 1900. かうがいちりも. 松村任三, 三好学編, 新撰日本植物図説, 下等陰花類部 1(9): 43.
- 岡村金太郎 1902. 日本藻類名彙. 敬業社. 東京.
- 岡村金太郎 1916. 日本藻類名彙. 第2版. pp 362. 成美堂書店. 東京.
- Ralfs, John 1848. The British Desmidiaceae. Reeve, Benham and Reeve. London.
- 斎田功太郎 1910. 内外普通植物誌, 下等植物篇. 大日本図書. 東京.
- 山岸高旺 1967. 日本産のテムノギラ属, ホシミドロモドキ属およびヂゴゴニウム属について. 日大農獣医. 教養. 紀要 2: 26-34.
- 山岸高旺 1977. 淡水藻図鑑. 内田老鶴圃新社. 東京.
- (930-01 富山市杉谷2630 富山医科薬科大学医学部)